

「朝鮮語史研究」（2008 年度第 1 回研究会）

日時：2008 年 9 月 20 日（土）午後 2 時半より午後 5 時

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306 号室）

内容：1) 伊藤智ゆき（AA 研所員）「延辺朝鮮語の漢字語アクセント」

2) 全員「朝鮮語史研究会研究活動について討論」

要旨（研究発表，伊藤智ゆき「延辺朝鮮語の漢字語アクセント」）

本発表では，中国北東部延辺朝鮮族自治州で話されている延辺朝鮮語の漢字語アクセントについて，15-16 世紀中期朝鮮語アクセント（約 30 種の文献調査による）からの歴史的発展と，その例外的変化に観察される類推の影響について分析を行った。分析対象は，延辺朝鮮語母語話者から得られた 2 音節漢字語（約 8,000 語）及び 2 音節固有語（約 800 語）である。主要な論点は以下の通り。

a) 漢字語アクセントは固有語アクセントと異なる類推変化を見せる傾向がある（漢字語 LH → HL，固有語 HL → LH）。これは，それぞれの語彙クラスにおいて，最も大きな割合を占めるアクセントクラスが異なっており（漢字語 HL，固有語 LH），類推変化は主要アクセントクラスに吸収される形で起きていることによる。またこのことは，話者が漢字語・固有語という語彙クラスの違いを認識していることを示すものでもある。

b) 2 音節漢字語においては，構成する漢字音の末子音の種類によって，アクセント変化の傾向が異なる（分節音の情報がアクセント変化に影響している）。これは，朝鮮語漢字語においては個々の音節構造とアクセントとの間に強い相関関係があるためである（Island of Reliability effect, Albright 2002）。

c) アルゴリズム（Stochastic Gradient Ascent learning algorithm, Jäger (to appear)）を用い，中期朝鮮語から延辺朝鮮語への歴史的変化シミュレーションを行った結果，延辺朝鮮語におけるアクセント変化は，異なる weight をもつ複数の制約を想定することにより説明される。

d) 中期朝鮮語 2 音節漢字語の LH/LL クラスにおいては，第 1 音節漢字音の頭子音が sonorant であるか否か，またそれが使用頻度の高い形態素であるか否かによって，その歴史的変化に統計学的に有意な違いが見られる。

本発表では更に，延辺朝鮮語における個々の漢字形態素の基底アクセントを，統計学的手法（信頼度）を用いて推定し，そのリストを付録資料として提示した。